

2020年3月22日 礼拝説教要旨

詩編講解説教8 「神は顧みてくださる」

詩編8：2～10、マタイ6：25～30

これまで第7編まで読んできましたが、特に3編からはダビデの歌とされ、それはダビデの嘆き、つぶやき、涙、怒りという負の感情がよく表された歌であり、祈りでもありました。具体的にはサウルとの確執、また自分の息子アブサロムに裏切られるといった、そういう苦しみが出露されておりました。それはこのあとの9編以降にも続いてまいります。しかし今日の第8編は少し趣が違ふ。これもダビデの詩となっていますが、内容としては、これまでのような負の感情を露わにするような歌ではない。それはむしろ神さまへの賛美が全面に出てくる。そういう内容になっています。

ちなみに今日の第8編は良い例となりますので少しだけお話ししますが、詩の初めと終わりが同じ言葉になる。こういう構造を囲み構造（インクルージオ）と呼びます。これからも詩編の中で度々こういう構造を目にすることになると思います。この囲んだところの中心にこの詩の主題がある。ではその中心とは何かと申しますと、5節から6節にかけて言われているのは「人間」ということです。特に5節にある「人」という言葉は皆さんも聞いたことがある「アダム」という言葉です。「人間は何者なのか」「人の子は何者なのか」それがこの詩の主題なのです。結論として、この詩編は、人間とは神さまを讃える存在であるということをお教えています。

この詩編第8編は嘆きではなく賛美である。しかもまるで嘆きの詩編に囲まれるようにしてこの賛美がある。私はむしろそれは嘆きの中でこそ神さまを讃えることができる、そういう者として人間は存在しているということではないか。そのことを心に留めることができれば今日は十分ではないかと思ふ。そしてそこでまず注目していただきたいのは、2、4節に「天」という言葉が出てくることです。「天を仰ぐ」それはただ空を見上げるというよりも、祈りであり、神さまにわたしたちの心を向けることです。しかも嘆きの時にです。一番、心が沈み、深い嘆きの底にある時に、天を見上げる。神さまのご支配を思う。信仰者にはそれができるといふことです。『ハイデルベルク信仰問答』でキリストの再臨についてこう答えます。「わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭を上げて、かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し、すべての呪いをわたしから取り去ってくださった、まさにその裁き主が天から来られることを待ち望むようにです」（問52）ここでも「悲しみや迫害の中でも頭を上げて」苦難の中で天を仰ぐ姿があります。

信徒の友4月号の「みことばにきく」では、ある教会の役員さんの娘さんが自死をされ、その深い悲しみの中でお父さんであるその役員さんが葬儀の挨拶をされたという話が紹介されておりました。葬儀の説教で詩編16編の「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見せず、命の道を教えてくださいます」の御言葉を与えられて、そのお父さんは「娘も今はイエスさまの十字架の贖いによって主のご復活の命に招かれていると信じています」と言われたそうです。それが嘆きの中で天を仰ぐということなのです。

2、10節の「全地」というのは、悲しみや悩みの絶えないこの地上のことです。そこにも神さまの力、ご支配が届いている。いや満ちていると詩人は言います。この世の現実を見れば信じられないかもしれません。それこそ今、世界中が新しい感染症の脅威にさらされ、人々は恐

れの中にあります。そこに神さまのご支配があるとは信じられない。神さまはこの世界を見放されたのか。そう誰もが思う時に、わたしたちは天を仰ぎ、神さまのご支配がなおこの地上にも満ちていることを讃えることができる。それはどうしてでしょうか。

5節に「御心に留めてくださる」「顧みてくださる」とあります。「御心に留める」というのは、思い起こす、記憶するということです。また「顧みる」とは、具体的に眼差しを向けることであって、そういう行動のことです。ただ思い起こすだけではなく、そこから行動が起こされる。悲しみや悩みの絶えない世界を神さまはおぼえてくださり、そして具体的に行動されるのです。その神さまの行動、顧みが最もはっきりとした形で表されたのがイエス・キリストの出来事です。この罪の闇に覆われた世界を神さまは憐れまれ、愛する独り子イエス・キリストを与えられた。それはまさに神さまの顧みの出来事であり、具体的な行動に他なりません。5節「人の子は何ものなのでしょう」それは他でもない悲しみ嘆くわたしたちのことですが、その人の子にキリストはなられた。「幼子、乳飲み子の口によって」（3節）とありますが、その全くの無力の象徴である幼子にキリストはなられた。それがクリスマスです。しかもその無力さはその最後の十字架の死に表されました。キリストほどに卑しく、弱く、貧しく、無力になり切られたものはないのです。そこまで神さまはわたしたちを顧みられる。特に受難節の中にあつて、そのキリストのお苦しみこそ、神さまの顧みが表されていることを心に留めなければなりません。このキリストを見つめる時に、わたしたちはどんなに逆境の中にあつても、天を仰ぐことができる。そういう意味でこの第8編もまた真にキリストの出来事によって満たされると理解してよいでしょう。

そしてこのキリストの御業のゆえに、わたしたちはその弱さ、無力さをただ嘆き、悲しむのではなく、その弱さ、貧しさを顧みられる神さまの恵みを感謝し讃える者へと変えられるのであります。パウロを思い起こします。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ、と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあつても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」（Ⅱコリント12：9～10）貧しさ、弱さの中でこそ、その幼子のような、何もできない時にこそ、わたしたちはそこに注がれる神さまの恵みを見て感謝し喜ぶことができる。実はそこにこそわたしたちの本当の強さ、力があります。